『語用論研究』第 19 号（2017 年）pp. 90-99
© 2017 年　日本語用論学会

〈一般投稿論文〉［研究ノート］

間投助詞の位置づけの再検討：終助詞との比較を通して*

大　江　元　貴
金沢大学

Recent approaches to *kanto-joshi* (interjection particles) and *shu-joshi* (sentence-final particles) predominantly analyze them together and reveal their common features and functions. In order to understand their complete picture, it is also necessary to comprehend their differences; however, few studies have examined this issue. This paper indicates the following: (1) *kanto-joshi and shu-joshi* have different syntactic, semantic, and pragmatic features. (2) *Kanto-joshi* can be classified into two types—*ne*-type (*ne, na, no*) and *sa*-type (*sa, yo*).

キーワード：　任意性、相互作用性、人物像、ネ type とサ type

1.　はじめに

日本語で「終助詞」と呼ばれる助詞群には、「行くカ」（疑問）、「行くナ」（禁止）のように文のタイプを決定するもののほかに、（1）のように文のタイプには関わらないものがある。

（1）　明日はきっと晴れる｛ネ／ナ／ノ／サ／ヨ／ゾ／ゼ／ワ｝。[1]

（1）の助詞群の一部は、（2）のように文末以外の文節末にも現れることがあり、これらは一般的に「間投助詞」と呼ばれる。

（2）　a.　うちネ、天井が低いから電気点けるだけで部屋が熱いんです !!
（BCCWJ Yahoo! ブログ）

*　本稿の一部は、2016 年 7 月に開催された第 15 回対照言語行動学研究会（於：青山学院大学）でのポスター発表の内容に基づく。本稿の執筆にあたって、質問紙調査に協力してくださった方々、多くの貴重なご助言をくださった 3 名の匿名の査読者と滝浦真人編集委員長に心より感謝申し上げます。

[1] 以下、本稿で考察の対象とする助詞は片仮名で表記する。

b. おれもナ、今しがた帰還したところだ。（BCCWJ 荒巻義雄『琵琶湖要塞』）
c. 儂は又兵衛殿とは違ごうてノ、儂らがおらんでも領民は路頭に迷わんと思う。（BCCWJ 山本音也『あの世この世の軍立ち』）
d. 日本人はサ、ごはんに砂糖をかけて食べるんだろ。（BCCWJ 井田真木子『小蓮の恋人』）
e. お前ってヨ、本当にムカツクんだよなあ。（BCCWJ 佐藤錦『いじめへの逆襲』）

本稿の考察対象は、（1）（2）に共通して現れるネ、ナ、ノ、サ、ヨである。[2] 文節末のネ、ナ、ノ、サ、ヨ（＝間投助詞）と文末のネ、ナ、ノ、サ、ヨ（＝終助詞）について、近年では両者の区別を積極的には認めない立場が優勢である。特に談話・会話における語用的機能に着目した研究にこの傾向は顕著で、山森（1997）、森田（2007）、Lee（2007）はこの立場に立つ。[3] 例えば、森田（2007: 52）は、ネやサは生起位置にかかわらず「相互行為の中で参与に関する調整を行うために行為を区切る」という共通の性質を持っており、間投助詞・終助詞の区別は不要と見ている。間投助詞と終助詞の区別を重視しない立場は、伝統的な文法研究にも見られる。梅原（1989: 326）はネ、ナ、ノ、サ、ヨなどの間投助詞・終助詞はいずれも表現内容を聞き手に持ちかけるという働きを持つ助詞であり、「両者には、文末にのみ位置するか、成分の切れ目に自由に位置するか、という違いがあるだけに過ぎないようである」と述べる。また、益岡（1991）、日本語記述文法研究会（編）（2003）も、本稿で言う間投助詞を終助詞の間投（的）用法と呼び、独立したカテゴリーとして認めていない。

これらの研究によって、間投助詞と終助詞が持つ共通性については多くのことが明らかになってきた一方で、両者にどのような違いがあり、その違いをどのように捉えるべきかという議論はほとんどなされてきていない。[4] また、間投助詞を独立して分析する研究が少ないことの必然的な結果として、間投助詞同士のパラディグマティックな関係を捉えるための体系的な記述も進んでいない。本稿は、従来等閑視されてきた間投助詞と終助詞の

[2] ゾ、ゼ、ワも「だ」を伴えば、「しかもだ{ゾ／ゼ}」「あの時、田中さんとだったワ、私、カラオケでデュエットしたのね、」のように文末以外に現れうることが定延・羅（2011）、定延（2015b）で指摘されているが、「だ」を介さずに文節末に現れるネ、ナ、ノ、サ、ヨとは性格を異にすることから、本稿の考察対象からは除外する。

[3] これらの研究では、本稿の言う間投助詞と終助詞を一括して「終助詞」（final particle）、「相互行為詞」（interactional particle）と呼んでいる。

[4] 伊豆原（2008）は、間投助詞と終助詞（と感動詞）の「ね」がそれぞれ特有の談話管理機能を持つことを指摘しており、両者の区別を重視している点で本稿と同じ立場に立つ。本稿は間投助詞・終助詞の違いが談話管理上の機能の違いにとどまらないことを種々の言語現象の観察から示す。

違いと、間投助詞同士の対立に関する基礎的観察を示し、間投助詞の位置づけについて再検討を加える。具体的には、以下の 2 つのことを示す。

① 間投助詞のネ、ナ、ノ、サ、ヨと終助詞のネ、ナ、ノ、サ、ヨは、統語・意味・語用の側面において異なった特徴づけが与えられる。特に、「任意性」「相互作用性」「人物像」の意味・語用的特徴は、間投助詞・終助詞がともに有する特徴として考えられてきたが、仔細に観察すると間投助詞と終助詞の間に差異を見出すことができ、これらの特徴はむしろ間投助詞と終助詞の違いを示す特徴として捉えなおされる。

② 間投助詞が出現する発話状況に着目すると、間投助詞は、ネ type（ネ、ナ、ノ）とサ type（サ、ヨ）の 2 つのタイプに大きく分けられる。

2. 間投助詞と終助詞の違い

まず、間投助詞と終助詞の間に見られる種々の差異について見ていく。なお、これ以降に挙げる例文（例文（10)-(13）と（19）を除く）の自然性判断は 35 名の日本語母語話者の協力を得て実施した質問紙調査の結果に基づく。[5] 調査では各例文を「0」(不自然）から「3」（自然）の 4 段階で判断してもらった。その平均値に応じて例文冒頭に記号を付している（0 以上 1 未満：「??」、1 以上 2 未満：「?」、2 以上 3 以下：「　」(記号なし))。

2.1. 統語的地位

統語的な観点から見ると、間投助詞と終助詞はカテゴリカルな対立を示す。それは、終助詞は従属度の低い節には現れるが従属度の高い節には現れないという節の従属度による制約を受けるのに対し、間投助詞の出現は節の従属度に制約されないという違いである。このことを端的に示すのが、以下の（3）と（4）の対立である。

(3) ??勉強をしなかった {ネ／サ} から、試験に落ちたんだ。
(4)　勉強を {ネ／サ} しなかったから、試験に落ちたんだ。

終助詞は、(3）のカラ節のような、引用節以外の従属節には出現できないことがよく知られている。一方、間投助詞は（4）のような終助詞が現れないカラ節、さらには（5）のナ

[5] 調査は、2017 年 9 月に実施した。調査協力者の年齢、性別、出身地の概要は以下の通り。
年齢　20 代：20 名、30 代：6 名、40 代：1 名、50 代：5 名、60 代以上：3 名
性別　男性：7 名、女性：28 名
出身地　北陸地方（石川、富山、福井）：11 名、関東地方（東京、埼玉、神奈川、群馬）：11 名、その他（岩手、宮城、新潟、長野、静岡、岐阜、三重、滋賀、兵庫、熊本）：13 名

ガラ節のような非常に従属度の高い節にも現れる。間投助詞は、フィラーと同じように、節の従属度の制約を受けない要素であると言える（「受験用のえーと、参考書をあのー、読みながら、勉強してるんだ」）。

（5）　受験用の｛ネ／サ｝参考書を｛ネ／サ｝読みながら、勉強してるんだ。

間投助詞と終助詞が節の従属度によってその出現が制約されるかされないかという点でカテゴリカルな差異を示すという事実は、両者が表面的な生起位置の違い以上の、全く異なった統語的地位を持つ助詞として位置づけられる可能性があることを示している。[6]

2.2.　任意性

ネ、ナ、ノ、サ、ヨは、間投助詞であれ終助詞であれ、格助詞や接続助詞のように言語上の関係を構成する働きは持たず、文の意味内容にも関わらない（半藤 2001）。したがって、命題的な統語・意味のレベルでは両者はともに任意の要素であると言える。一方、対人的な意味・語用のレベルで見ると、間投助詞と終助詞には程度差が生じる。日本語ではしばしば終助詞が強く要請される場合があり、例えば、（6）（7）のような文脈では終助詞ネ、ヨがないと不自然になる。

（6）　［A と B がよく晴れた空を見上げている］
　　A:　いい天気です｛ネ／??φ｝。
　　B:　そうです｛ネ／??φ｝。　（井上 1999: 79）

（7）　［切符を落としたことに気づかずに歩いていく聞き手の後ろから声をかける］もしもし、切符を落とされました｛ヨ／??φ｝。　（井上 1997: 62）

これに対して「間投助詞がないと不自然になる文脈」は想定できず、実際これまでにそのような文脈の存在を指摘した研究はない。命題的な統語・意味のレベルでは間投助詞・終助詞の任意性は同質であったが、対人的な意味・語用のレベルでは間投助詞の方が終助詞よりも任意性が高いという特徴づけが与えられる。

---

[6] 間投助詞は「節」の従属度には影響を受けないが、「文節」のあり方には大きく左右される。考え込みながら「ネ」と発話する、という点では変わりがない（ア）と（イ）に明確な自然さの差があることや、定延（2015a）が指摘するように、（ウ）に比べて倒置文の（エ）が不自然に感じられるという事実は、間投助詞にとって文節のかたちや位置が重要であることを示している。

（ア）??｛うーん／えー｝ネ、どうしようかなあ。
（イ）　｛うーんと／えーと｝ネ、どうしようかなあ。
（ウ）　後でさー、訴えられるよ。
（エ）　訴えられるよ、後でさー。　（定延 2015a: 30）

2.3.　相互作用性

先行研究では間投助詞・終助詞は、対話に現れる、聞き手に表現内容を持ちかける、相互行為上の働きをする、という特徴づけがなされてきた（梅原 1989、半藤 2001、森田 2007、Katagiri 2007）。このような特徴を仮に「相互作用性」と呼ぶとすると、任意性の差ほどではないが間投助詞と終助詞の相互作用性にも程度差が観察される。以下の（8）（9）は独り言の発話であり、話し手と聞き手の相互的やりとりは認められない。

（8）［ラーメンを一口食べた後に独り言で］
　a.　やっぱりラーメンはうまいネエ。
　b. ?やっぱりラーメンはネ、うまいネエ。
（9）［自分の車に落書きされているのを発見した男が独り言で］
　a.　まったく誰がやったのサ …。
　b. ?まったく誰がサ、やったんだ …。

間投助詞と終助詞が同程度に相互作用性を備えた助詞なのであれば、両者に自然さの差は生じないはずであるが、実際には終助詞のみが現れている（8a）（9a）に比べて、間投助詞が現れている（8b）（9b）は不自然に感じられる。間投助詞は終助詞よりも相互的なやりとりが必要になる、相互作用性の高い助詞であると言える。

先に見た任意性の問題もここでの相互作用性の問題も、間投助詞・終助詞が有する意味・語用的な特徴に程度差があるということを示している。格助詞などの他の言語形式と比べて間投助詞・終助詞がともに任意性・相互作用性の高い助詞であるという点には従来から注意が払われていたが、同時に、間投助詞が終助詞よりも任意性・相互作用性が高いという両者の程度差に対しても目を向け、何らかの説明が与えられるべきであろう。

2.4.　人物像

間投助詞・終助詞の中には、特定の人物像と結びついた「役割語」（金水 2003）の性格を強く持つものがある。例えば、（10）に現れるノは、間投助詞も終助詞も「老人」を想起させる（金水 2003、定延・羅 2011）。

（10）　おやおや、これはノ、50 年前の写真じゃノ。

ナも間投助詞・終助詞ともに「男」を想起させ、ネは間投助詞・終助詞ともに特定の人物像を想起させることはない。ネ、ナ、ノのように間投助詞・終助詞で想起させる人物像に差がない場合には、両者を区別せずにネ、ナ、ノの語用的特徴として記述すればよいが、サとヨについては間投助詞と終助詞を分けて考えなければならない。終助詞のサは「男」の人物像と結びついているが（金水 2003）、間投助詞のサに男女差は関わらない。（11）の質問者は「女」でもありうるが、応答者は「男」の発話者を想起させる。

（11）　明日ってサ、雨降るかな？──明日はきっと晴れるサ。

また、間投助詞ヨ（(12)）は「(粗野な）男」を強く想起させるが、終助詞ヨ（(13)）にはそのような特徴はない。

（12）　これはヨ、50 年前の写真なんだ。
（13）　これは、50 年前の写真なんだヨ。

サ、ヨのように、間投助詞と終助詞で想起される人物像が異なるという語用的特徴を捉えるためには、間投助詞と終助詞を区別して記述する必要がある。

3.　間投助詞の 2 つの下位タイプ

ここまで、間投助詞と終助詞が統語・意味・語用の面で異なった特徴を持つことを確認した。[7] 間投助詞が終助詞とは異なる特徴を持つ助詞として位置づけ直されるとするならば、間投助詞の体系を終助詞とは独立して検討する必要がある。この 3 節ではその足がかりとして、間投助詞はネ type（ネ、ナ、ノ）とサ type（サ、ヨ）の 2 つに大きく分けられる可能性があることを示す。なお、3 節の議論で用いる例文は判断がより微妙になるため、質問紙調査で得た 35 名の自然性判断の平均値（小数点第三位以下切り捨て）を併せて示す。

3.1.　サ type が自然で、ネ type が不自然になる発話状況

間投助詞の研究はネの分析に大きく偏っており、間投助詞同士の対立について検討している研究は極めて少ない。そのような中で、生天目（2006）は、ネとサが出現する発話状況の違いを明確に指摘している研究として注目される。生天目は、「情報要求」「同意要求」ではサは自然でネが不自然になることを指摘し、ネは「問いかけ」の伝達態度を含む発話には現れないことを明らかにしている。[8] 本稿では、生天目がネとサの違いとして指摘した事実は、もう少し広い範囲、つまりネ type とサ type の違いとして記述可能であることを指摘したい。(14) が情報提供、(15) が情報要求、(16) が同意要求の例である。[9]

---

[7] このほか、間投助詞と終助詞に音声的な面で違いが生じることを定延（2015a）が、特定の文末表現（「のだ」「わけだ」）との共起割合に差が見られることを大江（2016）がそれぞれ指摘している。

[8] 生天目（2006）はここからさらに踏み込んで、間投助詞ネは聞き手に対して述べ立て、聞き手を “audience”（言葉を理解するが直接応答しない者）として扱う伝達態度を標示する機能があるという議論を展開している。

[9] 本稿では紙幅の都合上コピュラと終助詞のバリエーションをまとめて示しているが、調査で使用した質問紙ではそれぞれの間投助詞にあわせて「これはナ、ピカソの絵なんだぜ」「これはノ、ピ

（14）　これは {ネ (2.82)／ナ (2.80)／ノ (2.22)／サ (2.68)／ヨ (2.51)}、ピカソの絵なん {だ／じゃ}{よ／ぜ}。

（15）　これって {?ネ (1.22)／??ナ (0.88)／??ノ (0.88)／サ (2.8)／?ヨ (1.91)}、誰の絵 ({だ／じゃ})？

（16）　これって {?ネ (1.74)／?ナ (1.0)／??ノ (0.94)／サ (2.85)／ヨ (2.25)}、ピカソの絵 {だ／じゃ} よ {ね／な}。

質問紙調査の結果では（15）のヨの判定がやや低く出ているが、全体の傾向としては情報提供では自然さに大きな差が見られないのに対し、情報要求と同意要求ではネ、ナ、ノがサ、ヨよりも不自然になりやすいということが観察できる。2.4 節で見た人物像に関しても、ネ、ナ、ノは間投助詞と終助詞で想起させる人物像の違いが見られなかったのに対し、サ、ヨは間投助詞と終助詞で想起させる人物像が一致しないという事実が観察されたことをあわせて考えると、ネ、ナ、ノが間投助詞の 1 つの下位タイプ（ネ type）をなしており、サ、ヨがそれとは別の下位タイプ（サ type）をなしていると見ることができる。(14)–(16) は、話し手の伝達態度のあり様がネ type とサ type を分ける要因の 1 つになっていることを示しているが、間投助詞のネ type が情報要求・同意要求のような「問いかけ」の伝達態度を含む発話で不自然になるという事実は、終助詞のネ、ナ、ノの特徴からは予測することができない（終助詞ネ、ナ、ノはむしろ「問いかけ」の伝達態度の表明に寄与する要素である）。間投助詞を終助詞と一旦切り離して考える必要があることが上記の言語事実からもうかがえる。

3.2.　ネ type が自然で、サ type の自然さが下がる発話状況

より判断が微妙になるが、（17）のような発話ではネ type よりもサ type の方が不自然に感じられやすい。

（17）　彼の出身ってどこだっけ？
　　—ええと {ネ (2.85)／ナ (2.02)／?ノ (1.91)／?サ (1.40)／?ヨ (1.22)}、… どこ {だ／じゃ}ったかなあ、うーん …。

これに対しては、「ええと」は検索や計算のための演算領域の確保をしていることを標示する形式であり（定延・田窪 1995）、サは「計算終了の標示」を表すと言われていることから（冨樫 2011）、「ええと」とサ（およびサに類するヨ）との意味的な不整合が生じているという説明が基本線では成り立つと思われる。ただし、間投助詞サ、ヨが「ええと」と自然に共起する（18）や実例（19）（レンタルビデオ店での対話場面）をどう扱うかという

カソの絵なんじゃよ」のような形で例文を提示して自然さを判断してもらっている。

問題は残る。[10]

（18）　彼の出身ってどこだっけ？──ええと｛サ（2.45）／？ヨ（1.25）｝、ほら、あそこ、鳥取！

（19）　「スイマセーンははははは」「はいはいなんでございましょうお客様」
「えーとヨォ新作でも三本で二泊三日になるって外に書いてあったんだけど」
（吉田総『荒くれ KNIGHT 10』秋田書店）

（17）と（18）（19）の違いを考えると、（17）は話し手が「彼の出身地」に関する微かな記憶を一生懸命たどりながら発話しているという状況が想定され、そのような心的処理にかかりきりになっている発話状況を想定するほどサ type は不自然に感じられる。それに比べると、（18）（19）は幾分余裕のある（心的処理にそれほどかかりきりになっていない）発話に聞こえる。（17）はサ type とネ type の違いに心的処理のあり様が関わっていることを強く示唆しているが、（18）（19）を踏まえると、サ（とヨ）が単純に「計算終了の標示」をしているとは言いにくく（（18）（19）でも計算を終了していないからこそ「ええと」が現れている）、サ type の特徴をより明確に把握するためには、その心的処理のあり様に関するもう一歩踏み込んだ記述が必要になる。

4.　まとめと今後の展開

2 節と 3 節の観察をまとめたのが以下の表である。2 節では間投助詞と終助詞を区別して観察することではじめて「統語的地位」「任意性」「相互作用性」「人物像」における違いが記述できることを指摘した。3 節では、生天目（2006）や冨樫（2011）などの先行研究の知見に基づきながら、伝達態度（コミュニケーション）と心的処理（認知）のあり様がネ type とサ type を分ける要因になっている可能性を示した。

[10] 質問紙調査では（17）と（18）のヨに差が出なかったが、筆者の内省では（18）のヨはサと同程度に自然に感じられる。質問紙の自由記述欄にはこの例文に限らず韻律によって自然さが変わるという意見もあり、例文の提示方法については検討の余地がある。

【表　間投助詞と終助詞の相違点】

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>統語的地位</th><th>任意性</th><th>相互作用性</th><th>人物像</th><th>出現しにくい発話状況</th></tr>
<tr><td colspan="2">終助詞</td><td>主節、引用節以外の節には現れない</td><td colspan="2">相対的に低い</td><td rowspan="3">ネ type は終助詞ネ、ナ、ノと人物像が一致するが、サ type は終助詞サ、ヨと人物像が一致しない</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">間投助詞</td><td>ネ type</td><td rowspan="2">ナガラ節などの従属度の高い節にも現れる</td><td colspan="2" rowspan="2">相対的に高い</td><td>「問いかけ」の伝達態度を含む発話</td></tr>
<tr><td>サ type</td><td>心的処理にかかりきりになっている発話</td></tr>
</table>

間投助詞・終助詞を共に扱う研究では、コミュニケーションの側面を重視した分析（森田 2007、Katagiri 2007、Lee 2007）、認知的側面を重視した分析（山森 1997、中村 2006、冨樫 2011）、両方の側面を考慮した分析（生天目 2008）など様々提案されているが、いずれも間投助詞と終助詞の共通性を捉える点に重点が置かれており、両者の差異や間投助詞のパラディグマティックな対立を説明するには不自由な点が多い。間投助詞・終助詞の全体像を捉えるためには、両者の共通性に加え、両者の違いを自然に説明できる枠組みが求められる。本稿はその足がかりとなる基礎的な観察を示した。

参照文献

半藤英明. 2001.「間投助詞から「表情詞」へ──終助詞と間投助詞のカテゴリー再編──」、『静岡英和女学院短期大学紀要』、33、45–56.

井上優. 1997.「状況認知と終助詞──「ね」の機能──」、『日本語学』、18(9)、79–86.

井上優. 1999.「もしもし、切符を落とされましたよ──終助詞「よ」を使うことの意味──」、『言語』、26(2)、62–67.

伊豆原英子. 2008.「間投助詞・終助詞の談話管理機能分析──「ね」「よね」「よ」の場合──」、『愛知学院大学教養部紀要』、56(1)、67–82.

Katagiri, Yasuhiro. 2007. “Dialogue Functions of Japanese Sentence-Final Particles ‘*Yo*’ and ‘*Ne*’.” Journal of Pragmatics 39, 1313–1323.

金水敏. 2003.『ヴァーチャル日本語役割語の謎』東京：岩波書店 .

Lee, Duck-Young. 2007. “Involvement and the Japanese Interactive Particles *Ne* and *Yo*.” Journal of Pragmatics 39, 363–388.

益岡隆志. 1991.『モダリティの文法』東京：くろしお出版.

森田笑. 2007.「終助詞・間投助詞の区別は必要か──「ね」や「さ」の会話における機能──」、『言語』、36(3)、44–52.

生天目知美. 2006.「間投用法「ね」が標示する聞き手への伝達態度」、『筑波応用言語学研究』、13、57–70.

生天目知美. 2008.「日本語の会話における「ね」の研究：情報管理と会話管理から見た文中の

「ね」と文末の「ね」」筑波大学博士（言語学）学位論文.
中村渉. 2006.「日本語の助詞「ね」の機能と語用論的曖昧性」、『語用論研究』、8、15–32.
日本語記述文法研究会（編）. 2003.『現代日本語文法 4 モダリティ』東京：くろしお出版.
大江元貴. 2016.「発話態度という観点から見た間投助詞──間投助詞の出現位置と発話連鎖に着目して──」、『日本語用論学会第 18 回大会発表論文集』、11、187–191.
定延利之. 2015a.「文節でしゃべる」、定延利之（編）『私たちの日本語研究──問題のありかと研究のあり方──』、30–33、東京：朝倉書店.
定延利之. 2015b.「日本語教育に「文節」を活かす」、『日本言語文化研究会論集』、11、1–15、17.
定延利之・田窪行則. 1995.「談話における心的操作モニター機構：心的操作標識「ええと」と「あの（ー）」、『言語研究』、108、74–93.
定延利之・羅米良. 2011.「文法・パラ言語情報・キャラクタに基づく日本語名詞性文節の統合的な記述」、Journal CAJLE 12、77–95.
冨樫純一. 2011.「終助詞「さ」の本質的意味と用法」、『日本文学研究』、50、150–138.
梅原恭則. 1989.「助詞の構文的機能」、北原保雄（編）『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』、302–326、東京：明治書院.
山森良枝. 1997.「終助詞の局所的情報処理機能」、谷泰（編）『コミュニケーションの自然誌』、130–172、東京：新曜社.